

第7章 まとめ—加古川流域における後半期の横穴式石室について

第1節 石室規模からみた時期別変化

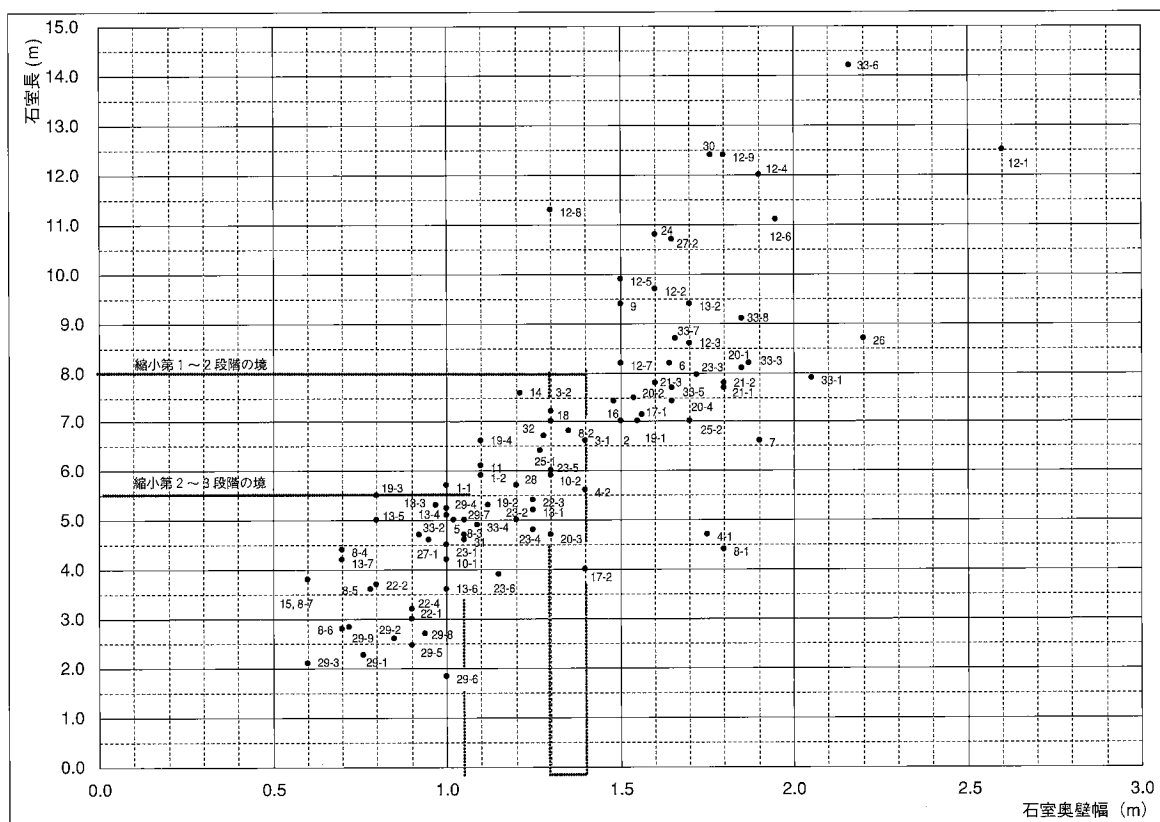
今回調査報告をおこなった状覚山5～17号墳は、終末期群集墳とも表わされる、7世紀後半の古墳群13基の調査となった。それらの墳形は方墳、墳丘は一辺4～8.5mと小規模で、石室にいたっては、すべて無袖の横穴式石室で、石室床面奥壁幅1.05m長さ5.25m以下のものであり、「小規模化」あるいは「退化」した石室と表現されるものである。

一般に、古墳時代後期も終末期になると、群集墳の石室は小型化するといわれているが、その過程については言及されたことが少ない。石室形態が無袖式になり、指標に用いる属性が減ることにより、石室構造変化がとらえにくい（丹羽2001）であろう。そのなかにあつて、西口圭介氏は姫路市西脇古墳群の報告において、同古墳群内の石室の規模について全長・幅の具体的数値により分類をおこなった（西口1995）。しかし、無袖式石室についても細分したことおよび各支群での消長に主眼を置いたため、無袖式石室そのものの変化については未消化に終わっている。その後、西播磨の黍田古墳群の報告において横穴式石室の変遷過程が検討されており、TK217型式を中心としたⅢ期には無袖式となり、小型化も進行し、幅1.3m以下、全長5.5m以下となることが指摘（中浜2000）されている。また、丹羽恵二氏は無袖の石室を全長と幅でのランク分けをおこなっている（丹羽2001）。ただし、大型無袖式石室を主としているため、7世紀以降にあたる規模Ⅲ～Ⅴのランクについての時期的変化等の詳細な検討が行なわれなかったのは残念である。一方、時期別に石室規模の具体的数値を示して、石室幅が縮小することを説いたのは池田征弘氏である（池田2005）。池田氏によれば、丹波市山南町野坂大谷古墳群では、Ⅰ期である12号墳の石室奥壁幅は1.8m、同じく13号墳は1.3mであるのに対し、Ⅲ期には22号墳が1.1mである以外は0.7～0.8mになり、時期が下がるほどに縮小する傾向がうかがえるとした。なお、野坂大谷古墳群Ⅰ期はTK43型式に併行し、Ⅲ期はTK217型式新段階に併行する時期である。

以上のように、近年になってようやく終末期の小規模古墳にも光が射してきたようである。しかし、調査された各古墳群内での石室規模変化にのみ視点が注がれ、他の古墳や古墳群との比較検討といった広い視野で行われることはなかったようである⁽¹⁾。

そこで、池田氏らの分析をふまえて、以下では状覚山5～17号墳の無袖式横穴式石室の位置付けを行なうため、近隣である加古川流域の既調査古墳・古墳群⁽²⁾の石室を中心にみることにする。その方法は、これまでは無袖式石室と有袖式石室を分けて検討されることが多かったが、ここでは、それらにとらわれることなく分析できる指標、すなわち、石室幅と石室長を基準とし、特に石室幅に着眼し分析を行なう。また、石室幅においては計測位置によって異なる数値になることが多いため、奥壁での床面幅の数値を採用し、その数値を比較するために作表した。また、地域的な特徴の比較も考慮して、加古川下流域のみならず、上流の丹波地域も加えることとした。その結果、一定の成果が得られた。

第10図は加古川流域における既調査の後半期横穴式石室⁽³⁾について、有袖・無袖の区別なく、横軸を石室床面での奥壁幅、縦軸を石室長として数値の散布状況を図にしたものである。扱った資料は第4表に掲げており、第10図と第4表の古墳番号は同一である。表の右方すなわち、幅が広く長い石室は時期も古く、幅・長さとも規模が小さい石室つまり図左方は時期が新しくなる傾向を示している。つまり、



第10図 加古川流域における後半期横穴式石室の規模散布図（番号は一覧表と対応）

所在地	古墳名	袖	奥壁幅(m)	初葬時期	番号	文 献	所在地	古墳名	袖	奥壁幅(m)	初葬時期	番号	文 献								
篠山市(西紀町)	沢の浦	1号	無	1.0	TK217	1-1	加東市社町	牧野小丸山	1号-I	片	(1.85)	TK43	20-1								
		2号	無	1.1	TK209	1-2			市橋1985	1号-II	片	(1.54)	MT85~TK43	20-2							
	桂ヶ谷奥	1号	片	1.5	TK209	2		村上・仁尾2001	上三草	2号	無	1.3	TK43頃	20-3							
		ずんが谷西	1号	片	(1.4)	TK43		3-1		山本・多賀・仁尾2002	3号	片	1.65	TK43頃	20-4						
(丹南町)		2号	無	(1.3)	TK209	3-2	兵庫県2002		7号	片	(1.8)	TK209	21-1								
		庄境	1号	無?	1.75	TK209~TK217	4-1		渡辺・別府ほか1987	8号	片	(1.8)	TK209	21-2							
		2号	無	1.4	TK209	4-2	椎老・吉田1983	9号	片	(1.6)	TK209	21-3									
	丹波市吉岡町	応相寺	1号	無	(1.17)	TK43~TK217		小野市	中寄	4号	無?	(0.9)	TK217	22-1							
2号			無	(1.0)	TK43~TK217		8号			無(立石)	(0.8)	TK217	22-2								
3号			無?	(0.7)	TK43~TK217		23号			無?	(1.25)	TK217中	22-3								
4号			無?	(1.0)	TK43~TK217		28号			無	(0.9)	TK217中	22-4								
5号			?	(1.0)	TK43~TK217		勝手野			1号	無	1.0	TK217新~TK46	23-1							
6号			無?	(0.9)	TK43~TK217					2号	無	1.2	TK217中	23-2							
7号			無	(1.02)	TK217	5				下山2000	3号	片	1.72	TK209~TK217古	23-3						
丹波市柏原町	東奥	1号	無(立石)	1.64	TK209	6	喜谷・真野ほか1973	三木市	舊屋	4号	無	1.25	TK217新~TK46	23-4							
		三原	1号	片	(1.9)	MT85	7			松岡・池田ほか2004	5号	無	1.3	TK217中	23-5						
丹波市山南町	野坂大谷	12号	両	(1.8)	TK43古	8-1				年ノ神	6号	無	1.4	TK217新?	23-6						
		13号	片	(1.35)	TK43	8-2					7号	無	1.15	TK217古	23-6						
		22号	無	(1.05)	TK217新	8-3					8号	無	1.0	TK217?							
		26号	無	(0.70)	TK217新~TK46	8-4					正法寺	1号	無(立石)	(1.6)	TK43~TK209	24					
		27号	無	(0.78)	TK217新	8-5						2号	片?	(1.27)	25-1						
		28号	無(立石)	(0.70)	TK217新~TK46	8-6		2号	両?			(1.7)	25-2								
		29号	無	(0.60)	TK217新~TK46	8-7		大平・池田2005	正法寺		1号	両	(2.2)	TK43~TK209	26						
多可町加美区	奥豊部	1号	無	1.5	TK43~TK209	9	安平1999	加西市	ヤクチ	2号	無	0.95	TK209~TK217	27-1							
		多可町中区	女夫岩	1号	無	1.0	TK217後半			10-1	4号	片	1.65	TK43	27-2						
西脇市	坂本	2号	無	1.3	TK209	10-2	宮原ほか1993			状見山		愛染	無	(1.2)	TK217新~TK46	28					
		石垣山	2号	無?	1.1	TK217前半	11					中村・藤田ほか1993	5号	無	(0.76)	TK46~TK48	29-1				
		東山	1号	片	2.6	TK209~TK217古	12-1					菱田ほか編1999	6号	無	0.85	TK48~TK48	29-2				
			2号	片	1.6	TK217古	12-2						7号	無	0.88	TK48~MT217					
			3号	片	1.7	TK217古	12-3						8号	無	0.60	TK48~MT21	29-3				
		10号	両	1.9	TK217中	12-4	菱田ほか編2001	9号	無			0.50	TK48~TK217								
		11号	?	1.5	TK217新	12-5		10号	無			1.00	TK46~TK48	29-4							
		12号	無(立石)	1.95	TK217古	12-6		11号	無			0.90	TK48~MT21	29-5							
		13号	片	1.5	TK217新	12-7		菱田ほか編1999	12号			無	1.00	TK48	29-6						
		14号	片?	(1.3)	TK217新~TK46	12-8		菱田ほか編2001	13号			無	0.70								
		15号	両	1.8	TK217新~TK46	12-9		菱田ほか編1999	14号			無	1.05	TK46~TK48	29-7						
		西脇市	坂本	1号	無	(1.25)		TK217中	13-1					15号	無	0.96					
				2号	片?	1.7		TK209	13-2					16号	無	0.94	TK48~MT21	29-8			
				3号	無	0.97		TK217中	13-3					17号	無	0.72	TK46~TK48	29-9			
				4号	無	1.0		TK217古	13-4					加古川市	志方二子塚	片?	(1.76)	TK43~TK209	30		
5号	無			0.8	TK217中	13-5		奥新田東	大亀谷山	2号	無(立石)					1.05	TK46~TK48	31			
6号	無			1.0	TK217新	13-6				池尻						両	1.28	TK217新~TK46(?)	32		
7号	無			0.7	TK217古	13-7	5号									両	(2.05)	TK209	33-1		
緑ヶ丘	高松			片	1.21	TK217古	14									岸本1995	7号	無	0.92	TK217古	33-2
				7号	無	(0.6)	TK46									15	岸本2003	8号	両	1.87	TK43前後
				四ツ辻	5号	無	1.48							TK209	16	森下1989	9号	無	(1.09)	TK217	33-4
加東市滝野町	黒石山	10号	片	1.56	TK209	17-1		(升田山)	11号			両?	1.65	TK209前後	33-5						
		11号	片	(1.4)	MT85	17-2			森下・宮原1986	15号	両	2.16	TK43~TK209	33-6							
		加東市社町	吉馬堀坂	A1号	無(立石)	1.3			TK209~TK217	18			17号	両	1.66	TK43~TK209	33-7				
				A号	片	1.55			TK43~TK209	19-1			18号	両	1.85	TK209前後	33-8				
B号	無			(1.12)	TK43	19-2	中村ほか1990a														
C号	無			(0.8)	TK209~TK217	19-3															
D号	片?	1.1	TK43~TK209	19-4																	

第4表 加古川流域における既調査の後半期横穴式石室一覧（）付数値は図上又は推定値

これまで指摘されていたように、時期が降れば規模が縮小するという傾向が加古川流域においてもうかがえることが証明された。このことをさらに詳細に見てみると、TK43型式期～TK209型式期以降の石室床面奥壁幅は2.2mを超えることがほぼなくなる（縮小第1段階）が、石室幅が1.3mを下回るものはまだ非常に少ない⁽⁴⁾。しかし、続くTK209型式期からTK217型式期に変わる頃からは、石室奥壁幅が1.3～1.4m以下（縮小第2段階）となる⁽⁵⁾。また、第2段階以降はさらに縮小し、TK46型式期以降には1.05mを超えるものが無くなる（縮小第3段階）。また、縮小第2段階には石室幅が狭まるのと同時に長さについても縮小傾向がみられ、石室長8.0mを下回るようになり、第3段階には5.5m以下となる。一方、石室形態のうち、有袖・無袖の別については、縮小第2段階においては、立石によって玄室・羨道を区別しているものもあるが、明確な袖部を有するものがほぼ認められない⁽⁶⁾ようになり、一気に無袖化が進行する。なお、無袖の石室は古くTK43型式期以降に認められる。ちなみに、現段階では、玄門立柱石を有する両袖・片袖式石室もTK43型式期あたりから認められるようである。

以上、加古川流域の後半期横穴式石室は、時期が降るにしたがって縮小することが、具体的数値をもって示すことができた。ここでは縮小の3段階を設定したが、状覚山5～17号墳においても縮小第3段階の典型を示した。また、この縮小化段階設定は状覚山古墳群内にとどまらず、広く丹波地域も含めた加古川流域にあてはまることも判明したが、他の地域、西播磨については未検討である。ただし、姫路市太市中古墳群のうち、小支群を形成している2・8・10号墳が調査され、TK217型式期において石室奥壁幅1.55mの2号墳、同1.32mの8号墳、同1.12mの10号墳の順に築造されたと考えられている（柏原・井守・深井2003）。2号墳の石室幅数値がやや大きいのが、TK217型式でもきわめて古い段階の土器と思われることから、加古川流域の縮小段階があてはまるようである。また、発掘調査された例ではないが、富山直人氏の分析（富山1999・2004）によると、赤穂市木虎谷古墳群においては2号墳が最初（TK43～TK209型式期）に築造され、その後石室規模が縮小するとされる。2号墳の石室幅は2.2m、次に築造された1・7～11・14号墳の石室幅が1.73～1.35m、その後築造された4・6・12・13号墳の石室幅は1.17～0.9mとなっている。具体的な時期は不明であるが、規模縮小の点で、富山氏の推定と今回の分析とが一致している。

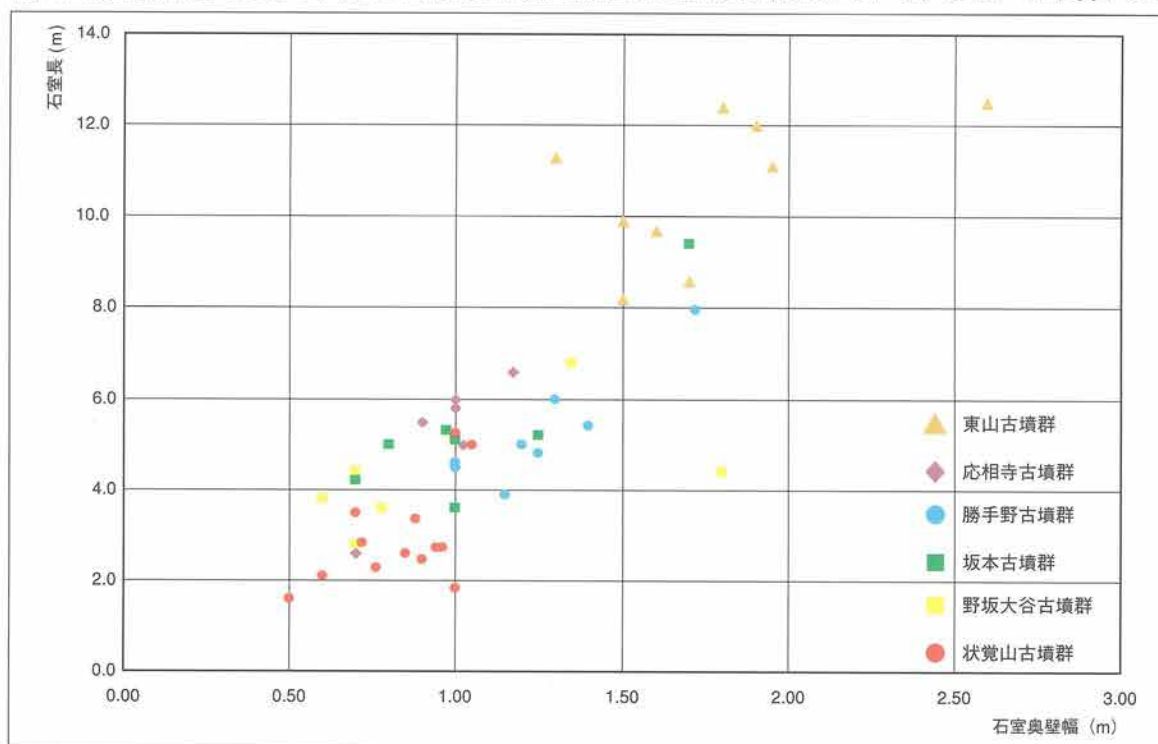
さて、話を加古川流域に戻そう。ここで特筆すべきは多可郡中町東山古墳群（菱田ほか編1999・2001）である。発掘調査の結果、TK209型式併行期に構築されたと考えられる1号墳の石室を嚆矢に、TK217型式併行期からTK46型式併行期に構築された2・3・9～15号墳の石室すべてについて、これまで述べてきた縮小段階が全くあてはまらない巨大な石室となっている。つまり、東山古墳群のうち、発掘調査されたすべての古墳において加古川流域の他の古墳とは石室規模の点で大きく異なっている。この現象をどう見るかについての答えは用意できていないが、東山古墳群にのみ認められる特異な現象として大きな存在となっていることはまちがいない。

なお、規模縮小の数値から大きく逸脱するものに、加古川市地藏寺古墳（奥壁幅1.785m）、加西市後藤山古墳（奥壁幅2.80m）・石櫃戸古墳（奥壁幅約1.8m）、多可郡中町村東山古墳（奥壁幅1.62m）がある。いずれも7世紀中葉以降と考えられる石室であるが、TK46型式期頃以降の石室でありながら、奥壁幅の数値が縮小第3段階の1.05mをはるかに凌駕し、他の古墳の石室と比べると格段に大きく、縮小化とはかけ離れて大きな数値となっている。これらの石室は、その規模もさることながら、奥壁のみならず側壁も巨石や切石で構築された一群であり、時期的にも官人墓と位置づけうる可能性がある。

第2節 古墳群内の造墓パターン

状覚山5～17号墳のうち、10号墳と14号墳の石室規模が他の古墳よりも大きいことおよび古墳群内では初期に築造されたことが判明した。それを石室奥壁幅と石室長を軸にして散布状況を図にしたのが第11図である。この図をみれば、状覚山5～17号墳内において10・14号墳が石室長・幅ともに群を抜いた規模であることが読み取れる。具体的には、10・14号墳は石室長5m、石室奥壁幅1mをそれぞれ超えているが、他の古墳では石室長3.5m、石室幅1m以下となっており、石室長においてその差が顕著である。また、10号墳では開口部に立柱石を有するやや複雑な構造の石室であり、わずかであるが、石棺内には管玉・刀子といった群内の他の古墳では認められない副葬品を有していた。ただし、副葬品の点については、他の古墳で石室・石棺が盗掘・攪乱を受けているものも存在するため、確定的ではない。状覚山5～17号墳のうち、10・14号墳以外ではそれぞれの差を明確にできる状況ではないようである。また、その分布状況から5～10号墳の支群と11～17号墳の支群に大きく分けることが可能であるが、10・14号墳はそれぞれの支群に分かれて存在しており、なおかつ10・14号墳間では石室規模がほぼ同じであることから、古墳群内の造墓単位としては、状覚山5～17号墳全体としてよりも各支群単位に分けて考えるほうがよさそうである。そこで、状覚山5～17号墳のように、古墳群内で最初に築造されたと考えられる古墳の規模や支群との関係および副葬品の多寡の問題について、加古川流域の同時期の古墳群について同様の作業を通じて検討を深めてゆくことにする。

状覚山古墳群とは距離的・時期的にも近い小野市勝手野古墳群の石室規模を散布図にしたのが第11図の水色である。勝手野古墳群はTK209型式期～TK46型式期に築造されたと考えられる8基の古墳が調査された(井守・久保ほか2002)。そのうち、TK209～TK217型式古段階の土器を出した3号墳が最初に築造されたことが判明している。3号墳は石室長7.95m、奥壁幅1.72mで群中最も大きく、石室形態も他の古墳が無袖式であるのに対し片袖式となり、複雑な石室構造を採用している。また、3号墳からは



第11図 加古川流域における後半期古墳群の石室規模比較図

金銅張杏葉や鏡板など豊富な馬具が出土し、5号墳からも出土しているが、「3号墳にくらべると5号墳は見劣りがする」（井守・久保ほか2002）。3号墳以外の石室規模は、奥壁幅1.0～1.4m以下、石室長3.9～6m程度までで、3号墳とは幅で30cm以上、長さで2m近くの差があり、馬具や石室形態を加味すればその差が格段に大きなものであることは否めない。

状覚山古墳群から加古川を北に遡った西脇市に所在する坂本古墳群では、TK209型式期からTK217型式期にかけて築造された7基の古墳の調査が行なわれ（岸本2001）、そのうちの2号墳が最初に築造されたと考えられている。2号墳の石室のみ片袖式石室と推定され、その規模も石室長9.4m、石室奥壁幅1.7mを測る。他の1・3～7号墳は無袖式石室で、石室長3.5～5.5m程度、石室奥壁幅が0.7～1.25mと石室長で4m、奥壁幅で45cmの差が2号墳との間に生じている。坂本古墳群は勝手野古墳群とほぼ同時に築造された古墳群であり、坂本2号墳の石室長は勝手野3号墳を1.5m近く上回っているが、奥壁幅ではほぼ同じ値である。また、1・3～7号墳は勝手野古墳群より若干小さいものの、よく似た規模構成となっている。坂本2号墳では馬具等の副葬品が出土しておらず、1・3～7号墳との差は石室規模と形態に限られるようであるが、その規模の差は先にみた勝手野古墳群における3号墳とその他の古墳群との差よりも大きいものであることから、馬具等の副葬品が出土していなくとも坂本古墳群中における2号墳とその他の古墳との間には歴然とした差が存在していることは間違いない。

次に、加古川をさらに遡った丹波市野坂大谷古墳群では、MT85～TK46型式期に築造された群集古墳6基が調査（大平・池田2005）された結果、12号墳が最初に築造され、次いで13号墳がTK43型式期に初葬が行なわれたことが判明した。12号墳は石室奥壁幅1.8mの両袖式石室で、片袖の13号墳の石室奥壁幅は1.35mを測り、両古墳で馬具が出土している。その後TK209型式期の古墳を欠くが、TK217～TK46型式期に築造された26～29号墳の石室奥壁幅は0.68～0.8mで、すべて無袖の石室となり、その規模は状覚山古墳群の範疇にあり、時期も近い。野坂大谷古墳群では、多くの未調査古墳が谷中に群集して存在していることと中間時期を欠くなど不明な点が多いが、ひとつの支群内と考えられる6基の古墳のうち、最初に築造された古墳は規模が大きく石室形態も複雑で、馬具を有していることを述べておく。

同じく丹波市の応相寺古墳群では、TK43～TK217型式期に埋葬された、谷中の古墳群7基が調査され（徳原1999、下山2000）、その報告にもとづき石室規模を図にまとめた。最も規模が大きい石室は1号墳であり、奥壁幅で20cm弱、石室長では約60cmの差をもって2～7号墳よりも大きな石室である。詳細な時期が不明なため、1号墳が最初の築造とはいえないが、可能性が高いことを指摘しておきたい。ただし、出土遺物による差は認められない。また、古墳群の石室規模はTK43～TK209型式期としては小規模であり、TK217型式期の規模を示すことも付記しておきたい。

前節でみたように、時期により石室規模縮小化の傾向はあるものの、その縮小化は漸移的なものである。ところが、古墳群中最初に築造されるのは、各縮小段階における最大ともいえるほどの規模を有する、最も大きな石室であり、後続する古墳が最初に築造された石室を凌駕することはなく、その規模差は時期差による縮小傾向よりも大きく、歴然としている。このように、時期が降るにつれて石室が小規模化する大きな流れのなかで、古墳群築造の契機となった古墳は大きな石室規模をもち、その後築造される古墳の石室規模は最初に築造された石室とは明確な差をもって小規模となる。これが加古川流域における後半期古墳群内の築造パターンであろう。

さて、古墳群内において最初に築造された古墳について、菱田哲郎氏は、東山古墳の分析を通じて、「東山古墳群では盟主墳―従属墳という身分表徴のための造墓原理が働いていて、坂本古墳群で代表され

る一般的な家族墓では、そのような原理はあまり働いていないと言ってよいだろう」（菱田2001）と述べ、西脇市坂本古墳群では「階層性を示す明確な規範を看取することはできず、2号墳を盟主墳、その他を従属墳という原理で捉えることが困難であり、「大型の2号墳は造墓活動の契機となった家族の墓を示すと見た方がよいであろう」（菱田2001）と、坂本2号墳の位置付けを低く見積もっている。小野市勝手野古墳群の報告において、井守徳男氏は勝手野3号墳の位置付けについて、「盟主墳的位置」と微妙な用語を使用している（井守2002）が、この評価を受けてのことと推察される。一方、他地域に目を転じると、芦屋市八十塚古墳群や宝塚市長尾山古墳群について、「それぞれの群を形成する支群のなかに、際立って大きな墳丘もしくは横穴式石室を有する古墳にあっては、それらを家父長的戸長の墓と見ることができ、これを中心として墓域が形成される」（直宮2002）と、積極的に評価しようとする意見もある。

そこで、東山古墳群について報告書（菱田ほか編1999・2001）から上記の検討を行ない、第11図に示した。その結果、古墳群中最初に築造されたと考えられる東山1号墳の石室は、他の2・3・10～15号墳とは大きくかけ離れた規模を有しており、1号墳のみ突出して大規模である。また、9・10・12・15号墳と2・3・11・13・14号墳との間に規模の小差がありそうである。その点は置くとしても、東山1号墳のみ突出した規模である点については、TK209～TK46型式期に築造された加古川流域の古墳の石室規模とはかけ離れて大きいにもかかわらず、さきにみた後半期古墳群内の築造パターンと合致する。つまり、東山古墳群のみが加古川流域の他の古墳・古墳群の石室規模と比較して、非常に大きいことが、特異的ともいえるほどの特徴となっているのである。そこで、東山古墳築造契機となった1号墳被葬者を盟主と呼び、坂本古墳群2号墳の被葬者を盟主でないとすれば、東山1号墳の被葬者以外には、既調査の加古川流域における後半期古墳群内には盟主と呼べる人物は皆無であることになる。ここはやはり、東山1号墳および東山古墳群築造主体者集団を特殊と考えるべきで、菱田氏が東山古墳群の被葬者像について、「北播磨地域において最も上位の階層に属していたと推測」（菱田2002）されるように、たとえ範囲を北播磨からもう少し広げても、東山古墳群ほど突出した石室規模を有する古墳群は見当たらないことから、菱田氏の評価が正しいことを裏付けていると思われる。そこで、東山古墳群以外のこれら古墳群の築造契機となった主体については、東山古墳群よりも下層にあるものの、古墳群築造可能集団として一般的な家族墓より上層に位置付け、古墳群・支群中の突出した規模の勝手野3号墳や坂本2号墳、状覚山10号墳、状覚山14号墳について、各古墳群あるいは支群の築造主体者集団の盟主と考えたい。また、野坂大谷12・13号墳、応相寺1号墳についてもその呼称をあてはめることは可能であろう。

以上、加古川流域の後半期古墳群について造墓原理とも呼べるパターンを抽出した。このパターンが他地域についてもあてはまるかどうかは未検討であるが、富山氏が分析（富山1999・2004）を行なった赤穂市木虎谷古墳群においては、前節でみたように、最も規模が大きい2号墳がTK43～TK209型式期に最初に築造されたようであるが、その後に築造された古墳群内の石室規模は2号墳を大きく下回り、その差は石室幅で50cm近くから1.3mにも達する。発掘調査を伴わないこの一例をもって、西播磨においても同様の造墓パターンであると言い切ることはできないが、少なくとも同様のパターンを示す古墳群が存在している可能性が高いことは指摘できるであろう。

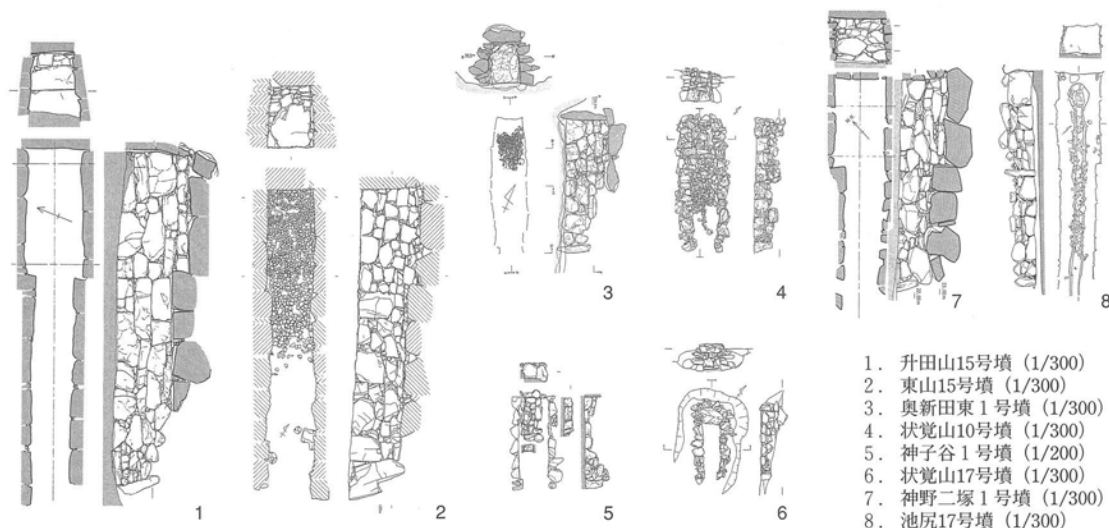
第3節 石室開口部の立石について

状覚山10号墳の石室開口部では両側に柱状の石を立てて石室端としており、その石室内側には小さな

塊石を積み上げていた。これと似たような構造は状覚山5・6・17号墳においても認められた。ただし、6号墳では柱状の石を立てていたが、側石1段分の高さ止まりであり、5・17号墳ではやや幅が広く低い石材を石室開口部に縦方向に置いていた。10号墳の省略・簡略形の可能性も考えられる。なお、他の部分の側壁はいずれも横積みとなっている。また、6・17号墳では、10号墳と同じように立石の石室外側の面が石室奥壁側に傾いている。このような石室開口部の立石で類似するものとしては、羨門立柱石と呼ばれるものがある。羨門部の立柱石については小中美幸氏が注目し、東山15号墳の類例を平荘湖古墳群の升田山15号墳や池尻16号墳に求め、東山15号墳の構造は平荘湖古墳群からの影響であろうと考えた（小中1999）。その後、中浜久喜氏（中浜2002）や丹羽恵二氏（丹羽2002）が類例を調査し、加古川流域を中心として分布し採用されていることが明らかにされている。丹羽氏は11例、中浜氏によれば12例を挙げ、讃岐地方などとの技術交流の結果生み出されたとの考えに及んでいる。

中浜・丹羽両氏が類例とした羨門立柱石をもつ石室は、その名が示すとおり、両袖や片袖式といった有袖式石室の羨門部両側に存在するもののみ類例を挙げており、玄室や羨道部の区別がない無袖式石室のものについては類例として認められていない。無袖の石室端に存在する立石は袖石としての機能や袖石が退化した可能性も考えられるため、立石の機能について検討の必要があるが、石室端に存在する現象を重視し、無袖式石室の開口部に認められる立石を「開口部立柱石」あるいは「開口部立石」と新たな呼称を設け、羨門立柱石とは分離して類例を求めたのち、両者の関係について検討してゆきたい。

開口部立石は状覚山古墳群以外には加古川市奥新田東1号墳（岸本・高木2001）、加西市愛染古墳（加西市・奈良大学1991）などがあり、状覚山10号墳と同様、高い立柱石を開口部端に設置している。奥新田東1号墳では側石3段分にも達する立柱石を垂直に立てているが、立柱石から外側の側壁には石を積んだ形跡が認められない。愛染古墳では片側しか残存していないが、側石2段以上の高い柱状石を2石連続して立てており、立柱石は状覚山10号墳と同様、石室奥壁側に傾斜させている。また、三木市正法寺3号墳（松村・小網ほか2000）の開口部には、石室内面が方形に近いが、側石2段目上部に達する大きな石材を置いており、立石の開口部側ラインが奥壁側に若干傾斜している。一方、状覚山10号墳の簡易・省略型と考えられる状覚山5・6・17号墳のように低い石材を石室開口部に縦方向に置いている例には、加古川市神子谷1号墳（岡本1996）があり、状覚山と同様に小規模な石室であるが、片側は側石3段分にも達する柱状石を垂直に立てている。ただし、立石の高さは50cm未満である。



1. 升田山15号墳 (1/300)
2. 東山15号墳 (1/300)
3. 奥新田東1号墳 (1/300)
4. 状覚山10号墳 (1/300)
5. 神子谷1号墳 (1/200)
6. 状覚山17号墳 (1/300)
7. 神野二塚1号墳 (1/300)
8. 池尻17号墳 (1/300)

第12図 羨門立柱石・開口部立柱石を有する石室および類似する石室

これら開口部立石はいずれも石室開口部の端にあって、羨門立柱石においてよく言われるのと同様に、石室の正面観を整えるという視覚的な効果が考えられると同時に、横積みの石室端部を崩れにくくし、安定させるという機能的な面も考慮すべきと思われる。また、内側に向かって傾いているものが多いことも機能面から考えれば納得できよう。したがって、このような視覚的・機能的見地からすれば、羨門部立柱石と同様と思われる。さらに、石室奥壁側に傾斜している立石や、石室外側の面が石室奥壁側に傾斜している立石の例が羨門立柱石においても多く認められることも、開口部立石との類似性を示している。なお、石室の正面観を整えるという視覚的な効果が考えられる開口部の立石として、有袖式のものに姫路市塩淵3号墳（深江・服部1999）・加古川市神野二塚古墳前方部とされる石室（高野1996）・加古川市池尻17号墳（上田ほか1969）例があり、加古川市池尻10号墳例（島田・上田ほか1965）もその可能性がある。また、加西市ヤクチ4号墳（立花1985）も開口部端に積み上げられた小塊石を除外すれば、類例に含まれるであろう。

次に羨門立柱石の機能のひとつとして、扉石を伴う閉塞施設に関連する構造であると考えられている（中浜2002）が、開口部立柱石を伴う石室において扉石は未検出である。また、状覚山5・6・17号墳例の簡易・省略形と考えられるものについては、塊石を積み上げて閉塞しており、扉石ではない。ただし、開口部立柱石を伴うすべての石室が扉を伴わないとは言いきれず、簡易・省略形とは分けておく必要があるかもしれない。そこで、立石や立柱石のうち高いものと、簡易・省略形と考えられる低いものとを分けておきたい。その境は限定しにくい、高さ80cm程度とし、塊石を積み上げて閉塞するものは開口部立石の低いものに認められることも指摘しておく。一方、羨門立柱石は規模の大きい古墳に採用されている（中浜2002、丹羽2002）ようであるが、この点も開口部立石をもつ古墳とは異なっている。

開口部立柱石はTK217新段階～TK46型式期以降に、加古川流域南部の加古川市・三木市・加西市域において認められる。また、簡略形もやや遅れてTK46～TK48型式期に採用されている。一方、羨門立柱石はTK43～TK209型式期の升田山15号墳が加古川流域での初現（中浜2002）とされ⁽⁷⁾、TK217新段階～TK46型式期の東山14・15号墳まで続いている。時期的には羨門立柱石に続いて開口部立柱石が出現しており、全期間にわたる重複や途切れが認められない。また、前節でみたようにTK217型式期から石室形態が有袖から無袖へと変化する動きと連動している。採用される地域が縮小し、大型古墳に採用されるとは限らなくなるものの、羨門部立柱石と開口部立柱石が同一の系譜にあると考えられる。そのことは視覚面および石室端を安定させる機能面からもうかがえるであろう。

初期の羨門立柱石が大型古墳に採用され、扉石を伴う閉塞施設に関連する構造であるとしても、定着後には機能分化や形骸化が起こることも考えられる。すなわち、塊石による閉塞が行われた簡略形の開口部立柱石においては、視覚面が重視され機能面が欠如した結果であると推定され、羨門立柱石が小型古墳の無袖式石室にも採用され、開口部立柱石となるのが定着後であることも、このような変容の結果と推定することができよう。したがって、羨門立柱石と開口部立柱石が同一系譜にあり、今後両者がまとめられる可能性を示唆しておきたい。

註

- (1)2001年に行われた播磨の横穴式石室の研究集会の発表（中浜2002、丹羽2002）においても、T K 217型式期以降の変化については石室構造に主眼が置かれ、特徴のある石室以外は播磨地域で数多く調査されている一般的な終末期の小型横穴式石室の規模変化については言及されていない。
- (2)発掘調査が行われていない場合、初葬時期や横穴式石室構築時期の判断に誤りが生じるおそれがあるためである。また、現在までに多くの古墳が調査されており、今回のような限られたデータによる分析には耐えうるだけの資料が揃っていると判断したためである。
- (3)ここではT K 43型式併行期以降の資料を主として扱った。これは、定型化する前の前半期横穴式石室においては、形態・規模などのばらつきや地域的な偏りが多く、目的にそぐわないためである。
- (4)社町吉馬滑B・C・D号墳（表番号19-2～4）や加西市ヤクチ2号墳（表番号27-1）および篠山市沢の浦2号墳石室（表番号1-2）のように奥壁幅が1.3mを下回るものも小数存在するが、無袖がほとんどである。
- (5)加古川市大亀谷山古墳（表番号32）、三木市年ノ神2号墳（表番号25-2）、篠山市庄境1号墳（表番号4-1）石室のように奥壁幅の広いものも例外的に存在する。
- (6)西脇市緑ヶ丘古墳（表番号14）は片袖だが、T K 217型式でも古い段階であるためであろう。また、先述の大亀谷山古墳石室は袖幅15cmと僅かながら明確に突出しており、奥壁幅も広い。同古墳からはT K 217型式新段階以降の須恵器が出土しているが、石室構築時期はもう少し遡る可能性を考えておきたい。
- (7)ただし、同じく羨門立柱石を有する池尻16号墳の方が升田山15号墳よりも若干時期が遡る可能性が考えられる。

参考文献

- 池田征弘2005「古墳群について」『野坂大谷古墳群―西大谷川災害関連緊急砂防事業に伴う発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 市橋重喜・池田正男ほか1987『沢の浦古墳群―近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ―』兵庫県教育委員会
- 井守徳男2002『勝手野古墳群の築造過程』『勝手野古墳群』兵庫県教育委員会
- 井守徳男・久保弘幸ほか2002『勝手野古墳群』兵庫県教育委員会
- 上田哲也ほか1969『印南野―加古川工業用水ダム古墳群発掘調査報告その2―』加古川市教育委員会
- 太田宏明1999「『畿内型石室』の属性分析による社会組織の検討」『考古学研究』第46巻第1号（通巻181号）
- 大平茂・池田征弘2002「窟屋1号墳」『平成13年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 大平茂・池田征弘2005『野坂大谷古墳群―西大谷川災害関連緊急砂防事業に伴う発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 岡崎正雄ほか1993『箱塚古墳群―近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XXⅡ―』兵庫県教育委員会
- 岡本一士1982「志方町二子塚古墳の調査」『加古川市埋蔵文化財調査集報Ⅰ』加古川市教育委員会
- 岡本一士1996「神子谷古墳群・カメ焼谷古墳群」『加古川市史 第4巻 史料編Ⅰ』加古川市
- 小田木治太郎1996「升田山15号墳」『加古川市史 第4巻 史料編Ⅰ』加古川市
- 加西市遺跡調査会・奈良大学1991『愛染古墳発掘調査現地説明会資料』
- 柏原正民・井守徳男・深井明比古2003『太市中古墳群―一般国道29号改良事業発掘調査報告書―』兵庫県教育委員会
- 柏原正民・深井明比古2001「大亀谷山古墳―山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告XXXⅢ―』兵庫県教育委員会
- 岸本一郎1995「緑ヶ丘古墳発掘調査報告書」西脇市教育委員会
- 岸本一郎2001「坂本古墳群―西脇公園山麓開発に伴う横穴式石室墳の発掘調査―」西脇市教育委員会
- 岸本一郎2003「高松古墳群」『西脇市古墳調査集報』西脇市教育委員会
- 岸本一宏・高木芳史2001『奥新田東古墳群―山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告XXXV―』兵庫県教育委員会
- 喜谷美宣・真野修ほか1973『柏原町東奥1号墳・拳田古墳発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 口野博史1985「舞子古墳群東石ヶ谷1号墳」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 小中美幸1999「東山古墳群の横穴式石室について」『東山古墳群Ⅰ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室
- 是川長1970「考古学上からみた三木地方の古代／加古川流域須恵器編年」『三木市史』三木市（正法寺1号墳）
- 佐藤隆2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年―陶器窯跡編年の再構築にむけて―」『大阪歴史博物館研究紀要』第2号
- 島田清・上田哲也ほか1965『印南野―加古川工業用水ダム古墳群発掘調査報告―』加古川市教育委員会
- 下山文隆2000「応相寺遺跡・応相寺古墳群（第2次）」『氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅲ』氷上郡教育委員会
- 輔老拓治・吉田昇1983『近畿自動車道関係埋蔵文化財調査報告（1）―庄境2号墳―』兵庫県教育委員会
- 第2回播磨考古学研究集会実行委員会2001「播磨の横穴式石室実測図集成」『第2回播磨考古学研究集会資料集』
- 高瀬一嘉福1995『西脇古墳群―山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XⅤ―』兵庫県教育委員会
- 高野政昭1996「二塚1・2号墳」『加古川市史 第4巻 史料編Ⅰ』加古川市
- 立花聡1985「ヤクチ古墳群―県営西在田地区農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告―』加西市教育委員会
- 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

丹治康明・橋詰清孝1994『高塚山古墳群発掘調査概要』神戸市教育委員会

徳原多喜雄1999「応相寺遺跡・応相寺古墳群」『氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅱ』氷上郡教育委員会

徳原多喜雄2003「谷川遺跡群（谷川踊場遺跡・谷川東山古墳群）」『氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅴ』氷上郡教育委員会

富山直人1999「兵庫県千種川流域の横穴式石室について―支流矢野川流域を中心として―」『古代文化』第51巻第11号（通巻第490号）

富山直人2004「横穴式石室の諸段階とその地域性―初期国家再編過程への一視点―」『古代文化』第56巻第9・10号（通巻第548・549号）

直宮憲一2002「西摂における群集墳の築造とその展開」『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究室

永井信弘1995「播磨における古墳時代須恵器の変遷／まとめ」『小谷遺跡（第6次）―屋内ゲートホール場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』加西市教育委員会

中浜久喜2000「黍田古墳群における横穴式石室の構造と変遷」『山津屋・黍田・原』揖保川町教育委員会

中浜久喜2002「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『横穴式石室からみた播磨―第2回播磨考古学研究集会の記録―』第2回播磨考古学研究集会実行委員会

長濱誠司・松岡千寿ほか2002『年ノ神古墳群―山陽自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告XXXⅥ―』兵庫県教育委員会

中村弘・藤田淳ほか1993『石垣山古墳群・石垣山遺跡―余暇村公園都市計画公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』兵庫県教育委員会

中村浩ほか1990a『社・吉馬―古窯跡群等の発掘調査報告書―』吉馬古窯跡群埋蔵文化財調査会

中村浩ほか1990b『社・牧野―古窯跡群等の発掘調査報告書―』牧野古窯跡群埋蔵文化財調査会

西口圭介1995「西脇古墳群の構造について」『西脇古墳群』兵庫県教育委員会

丹羽恵二2001「多可郡における大型無袖式石室について」『東山古墳群Ⅱ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

丹羽恵二2002「託賀郡と賀毛郡域の横穴式石室と編年」『横穴式石室からみた播磨―第2回播磨考古学研究集会の記録―』第2回播磨考古学研究集会実行委員会

菱田哲郎1999「東山古墳群出土土器の編年とその特色」『東山古墳群Ⅰ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

菱田哲郎2001「東山古墳群の形成過程と造墓原理」『東山古墳群Ⅱ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

菱田哲郎2002「横穴式石室墳の造墓原理」『横穴式石室からみた播磨―第2回播磨考古学研究集会の記録―』第2回播磨考古学研究集会実行委員会

菱田哲郎ほか編1999『東山古墳群Ⅰ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

菱田哲郎ほか編2001『東山古墳群Ⅱ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2002『三沢山北麓の遺跡―丹波並木道中央公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査概要―』

深江英憲・服部寛1999『塩淵3号墳―神谷ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』兵庫県教育委員会

藤岡弘・橋爪康至1969『小野市中番地区群集墳調査概報』小野市教育委員会

松岡千寿・池田征弘ほか2004『三原遺跡・畑田遺跡―丹波の森公苑整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』兵庫県教育委員会

松村正和・小網豊ほか2000『正法寺古墳群』『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ―昭和60年度～平成6年度』三木市教育委員会

松本正信・加藤史朗ほか2000『山津屋・黍田・原一町道山津屋・原線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』揖保川町教育委員会

宮原文隆ほか1993『安楽田・女夫岩遺跡』中町教育委員会

宮本郁雄・渡辺伸行1983「舞子古墳群西石ヶ谷3号墳」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

村上賢治・仁尾一人2001「桂ヶ谷奥古墳群」『平成12年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

森下大輔1989『四ッ辻古墳群』加東郡教育委員会

森下大輔1993「上三草古墳群7・8・9号墳」『埋蔵文化財調査年報―1990年度―』加東郡教育委員会

森下大輔・宮原文隆1986『黒石山古墳群』加東郡教育委員会

森田稔1983a「舞子古墳群西石ヶ谷1号墳」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

森田稔1983b「舞子古墳群西石ヶ谷4号墳」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

安平勝利1999『奥豊部1号墳』加美町教育委員会

山内紀嗣1984『那波野古墳』相生市史編纂室

山内紀嗣1996「地蔵寺古墳」『加古川市史 第4巻 史料編Ⅰ』加古川市

山上雅弘・多賀茂治ほか1996『飾東2号墳―山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XX―』兵庫県教育委員会

山崎信二1986（1985）「横穴式石室構造の地域別比較研究―中・四国編―」1984年度文部省科学研究費奨励研究A

山田郁子1996「池尻16号墳」『加古川市史 第4巻 史料編Ⅰ』加古川市

山本三郎・多賀茂治・仁尾一人2002「ずえが谷西古墳群」『平成13年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

山本雅和1995「狩口きつね塚古墳」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

山本祐作1996「中山古墳群」『加古川市史 第4巻 史料編Ⅰ』加古川市

渡辺昇・別府洋二ほか1987『庄境1号墳―近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ―』兵庫県教育委員会